

マーロウ作「タマレイン」の 技法についての一考察

小林 絢子

英語の歴史における幾度かの借入語の波の中でルネサンス期に入ってきたラテン・ギリシャ借入語とフランス語は特にイギリスの劇、詩歌、パンフレット等の文学作品の語彙や表現を豊かにした。中でもシェイクスピアをはじめとする劇作家の使った華麗な語彙・語法は有名である。中世以来の英国の演劇は教会やサークルで行われたものが多く、これらがエリザベス朝演劇が栄える土台となった。一方、上演を目的としない、文学作品としての演劇、即ちクローゼット・プレイの始まりもその興隆を支えた。シェイクスピア直前、あるいは同期の「大学才子」と呼ばれる劇作家たちのこの分野における活躍を見逃すことは出来ない。クリストファー・マーロウ (Christopher Marlowe 1564-93)、ロバート・グリーン (Robert Greene c.1558-92)、トマス・ナッシュ (Thomas Nashe 1567-1601)、トマス・ロτζジ (Thomas Lodge c.1558-1625)等がそれにあたる。今回は彼らの作品の中でマーロウの「タマレイン」(*Tamburlaine the Great* 1590)を取り上げてその魅力を探ってみたい。

この劇の魅力は blank verse (無韻詩)の効果的な使い方にあるといわれている。脚韻にとらわれず、歩格のみにこだわっていれば、言葉はより自由に壮大に使うことが出来る。古くはタッカー・ブルック (Tucker Brooke) がそれを押韻の特徴、繰り返しや比喻などの修辞学的見地から分析したし、⁽¹⁾ ドナルド・ピート (Donald Peet) はもっと機械的に修辞学的分類をした上での観察から、タマレインは心理的分析の対象ではなく、人間の抽象的資質の権化 (可能な限り高められた力を持つもの) としてマーロウから取り扱わ

れている、⁽²⁾と結論した。以上のことは直接blank verseと結びつかないが、「タマレイン」という作品の訴えかける力が詩の形式という技術的側面と主人公の王者らしさという内的抽象的側面の両方から解明できるかもしれないという可能性を私に示唆した。故にこの小論ではマーロウの「タマレイン」における詩的表現の特徴を主として追求し、併せて主人公の支配欲というものについてシェイクスピアの例をみながら考察していきたい。

まず、blank verseの詩劇で最も効果的に駆使されるようになった「句跨り」(enjambment)は意外にも「タマレイン」では少ない。このことはブルックも指摘している。⁽³⁾彼は又マーロウの韻律は変化はあるが不規則ではない、例えば女性韻は2%のみ、といている。⁽⁴⁾この説を受け入れ、それになにか付け加えるとすれば「タマレイン」の詩行の変化は、一行の中に二つの概念を持つ句を入れるという技法によって齎されているのではないか、という事が言えると思う。例えばコスローが“I know it well, my lord, and thank you all” (Pt.I; I-i-187)と言う時、my lord という中間休止の間投句の前と後では違う事を言っていて、又、同時にその行全体でその行の前と後のつなぎの役を果たしているし、テケレスがWhat now? In love? (Pt.I, I-ii-106)と訊く時は、詩脚の不足による変化の他に、一般的疑問から主題の特定化という内容的変化がこの詩行に見られる。このような例は第1部には上の例も含めて8例ほど見られるが、⁽⁵⁾第2部には少なく、あっても1行の後半は付け足しの句という感じで、句に締まりがなくなっている。(例：No talk of running, I tell you, sir. Pt II., I-ii-16)⁽⁶⁾

次に「繰り返し」の技法について、ブルックは「マーロウの‘繰り返し’は無意識のもので・・・言葉を少々ちがえて生き生きした概念が自動的にかなり間をおいて再現されている」⁽⁷⁾と言い、その例を18ほど挙げている。⁽⁸⁾これに対し、ピートは、マーロウはこの技法を他の同時代作家よりもたくさんは使っていない、と言っている。⁽⁹⁾確かに第1部と第2部とあわせて機械的繰り返しを含めて30余りの繰り返し⁽¹⁰⁾は多い方ではないし、ましてやそれが大変離れた場所で繰り返されていることもあるとなると、繰り返しと

いう感じもしなくなるから、「繰り返し」がマーロウの特徴的技法とは言えないであろう。ブルックは又、その「繰り返し」の4分の3は「タマレイン」の第2部に見られる、と言い、それを「多分その作品がやや急いで書かれて思想が貧困なことを示している」⁽¹¹⁾と理由づけているが、「繰り返し」技法を安直であるとか、思想の穴埋めのための技法とどるか、あるいは効果的な技法とどるかは当然、劇のその場の内容によることであって、一概には言えない。例えば第2部 I-i-86-91でオーケイナスがジギスムンドに *Forgett'st thou* を3回も繰り返して、自分の戦功を思い起こさせる時、又、Pt.II III-v-34-45で *your majesty* が繰り返される時等は単調な印象を与えるが、Pt.II V-iiでアマシア王やカラパインが *verse paragraph* の終わり、あるいは自分の台詞の終わり(18-40行)で約5行おきに“*Tamburlaine*”(その前に *tyrant, cursed, this* 等の修飾語をつけて)と繰り返す所はタマレイン攻略に集まったという事態の緊急さをあらわしているし、つづくカラパインの *come* (V-ii-56)、次のタマレイン側の3回の *come* (V-iii-48,52,58)もそれを受けて立っていて、場面を韻律の上からも引き締めている。

上の「繰り返し」の“*Tamburlaine*”という言葉は全部行末に来ているが、多音節の名詞が行末にくるという現象は、ルートによって既にマーロウの特徴として指摘されている所である。⁽¹²⁾ これは行に重みを与える効果を持つといわれるが、この重みは又、後置形容詞を行末においた場合にも出てくるものである。後置形容詞はアボットによるとラテニズムの影響であり、シェイクスピアにも多く見られ、特に分詞が完全に形容詞化されていない時、つまりまだ動詞性が多く残っている時によく見られるが、⁽¹³⁾「タマレイン」の場合はそれが荘重さを与える良い修飾の一方法となっている。例えば *Scythian shepherd so embellished* (Pt. I, I-ii-155) や *his joints so strongly knit* (Pt.I, II-i-9) という言い方は次の行でその様子を敷衍することも出来て(前者では例えば *with nature's pride and richest furniture* が続く)修飾のしかたに多様性を与えている。このような後置の形容詞(分詞形以外も含む)は第1部では19回、第2部では13回見られるが、第2部

では殆どタマレイン (8回) とアナトリア王 (3回) によって使われている。⁽¹⁴⁾ あたかもこういう言い方がスピーチに個人的特性を与えているかのような印象を与えている。

マーロウの詩行の力強さは、上の他に do による強調形や形容詞の最上級形の多用ということによって表されていると考えられるが、前者は「タマレイン」ではあまり使用されていない。私の見た限りでは第1部に5回、第2部に3回見出されるのみである。⁽¹⁵⁾ しかもその使用は、例えば Fortune herself doth sit upon our crests (Pt.I, II-ii-73) のように (強調は再帰代名詞ですでに表されているのだから) 韻律の為かと思わせる場合も少なくない。次の形容詞の最上級形もそれほど多用されていない。(第1部に4回)。⁽¹⁶⁾ 人や物事を描く時、単に最上級形で修飾するよりも、例えば、the highest monarch of the world (Pt.I, III-i-26) や Zenocrate, the loveliest maid alive (Pt.I, III-iii-117) というよりも、同等のものと対比させる、例えば、affecting thoughts co-equal with the clouds (Pt.I, I-ii-65) という言い方や、比較級を使う、例えば、His talk much sweeter than the Muse's song (Pt. I, III-ii-50) という言い方のほうがより単調でないことをマーロウは知っていたのだろう。確かに A hundred Tartars shall attend on thee / Mounted on steeds swifter than Pegasus (Pt.I, I-ii-93-4) とタマレインから言われたほうが A hundred Tartars mounted on the swiftest steeds shall attend thee. と言われるよりゼノクラテの頭には自分の未来の地位が鮮やかに描き出されたであろう。この比較の言い方は第1部では26回、第2部では19回使われている。⁽¹⁷⁾ 第2部で回数が減っている原因は、この構文は印象的なので頻用されすぎると逆効果になるからとも推測されるし、greater とか more precious が多く出てくると (Pt.ii, I-iii-18, III-iv-42, III-iv-46, IV-ii-30, V-iii-39) 比較の対象物が枯渇してくるからだとも考えられる。

それから「タマレイン」の詩句の壮大さは、その豊かな隠喩 (metaphor) や直喩 (simile) に負う所が多いということは、カーペンターが「タマレイ

ン」にはこの2つの技法が400ある(これに比べてマーロウの他の4作品には合計250あるのみ)と指摘して以来定説となっている。⁽¹⁸⁾ ここでその比喩を全部繰り返す必要はないであろうが、唯一つ、「タマレイン」の比喩は古事・伝説よりも雄大な自然への言及で満たされているという特徴を持っているという事を付け加えたい。例えば短い斧 (curtule-ax) のことをタマレインが *These are the wings (which) shall make it fly as swift / As doth the lightning or the breath of heaven* (Pt.I, II-iii-57-8) と形容したり、「3日以内に」というべきところをバジュゼスが *before the sun have measured heaven / With triple circuit* (Pt. I, III-i-36-7) と表現するのがその代表的なものである。「タマレイン」の比喩の範囲は南極 (Pt., IV-iv-134-6) にとどまらず、月、惑星、彗星 (Pt.I, V-i-150, 230) に及ぶが、このような雄大な比喩は第2部では減っているし、⁽¹⁹⁾ 又、出てきていても既に二番煎じの感を与える。(例えば第2部でゼノクラテの死を嘆くタマレインは神々も星々も全世界の人々も彼女の死を嘆きにやってくる、というが、そこに出てくる *the center's latitude* を超えて我々の *hemisphere* にやってくるという句 III-ii-27-33 もそれほど生き生きしたヴィジョンを与えない。) 又、第1部ではベルシャ王弟コスロー (3回) やトルコ皇帝バジュゼス (5回) もタマレイン (13回) に負けずに同じような自然への言及の仕方をするが、第2部では星や空を動員して語るのは6ヶ所のうち5ヶ所がタマレイン自身の口から出ているケースとなっている。⁽²⁰⁾

次に語彙の面から「タマレイン」の魅力を見てみると、まず、形容詞の使い方が独特であることに気がつく。例えば分詞形を巧みに利用した *faint-hearted runaways* (Pt.I, I-ii-130), *the late-felt frowns* (Pt., II-ii-85), *his greedy thirsting throat* (Pt. II, I-ii-146) や、副詞と形容詞を組み合わせさせた *his triple-worthy burial* (Pt.I, III-ii-112), *foolish-hardy Tamburlaine* (Pt.I, III-iii-145), *ever-drizzling drops of April shower* (Pt.I, IV-i-31) などはマーロウの創作であろう。このような新鮮な形容句は第1部には約40ヶ所、第2部には約20ヶ所⁽²¹⁾ 見られるが、この場合は奇矯とか斬新

な組み合わせ、という尺度は曖昧なものである、断定的数量が挙げられない。ただこの場合も後置形容詞と同じく、第2部ではタマレイン自身の口から語られる頻度が高くなっているという事だけはいえるようである。⁽²²⁾ 又、シェイクスピアにも見られることだが、副詞の使い方が上手なことは、上述の副詞と形容詞の組み合わせによる修飾の他に *Is it not passing brave to be a king ...?* (Pt.I, II-v-53) 又は *so he bids / That may command thee piecemeal to be torn* (Pt.I, IV-ii-23-4) などという言い方に、見られると思う。この他 *headlong* (Pt.I, II-ii-45), *true* (Pt.I, II-ii-74), *straight* (Pt.I, II-ii-18) というような形容詞にも使われる副詞を愛用する点もマロウの詩句に簡潔さを与えているといえる。簡潔といえば、*of* を使わない所有形、例えば *bullets and weapons' points* (Pt.I, III-iii-157), *her morning's pride* (Pt.I, V-i-140), *cities' sacrifice* (Pt.II, prol. 7) 等も「タマレイン」で頻用されている形である。⁽²³⁾

タマレインの夢が世界制覇だったとすれば、名詞では *king*, *emperor*, *conqueror* 等がこの劇に多く出てくることが予想される。確かに *kings*, *kingly* は第1部に73回、第2部に45回出てきて、そのうちタマレイン自身の口から語られるのは第1部で27回、第2部で17回である。⁽²⁴⁾ *king(s)* の次に多いのは第1部の *crown* と *throne* (計59回、第2部では23回)、*emperor*, *empire* とその派生語 (33回、第2部では13回)、第2部では *majesty* (33回、第1部では14回)、第1、第2部両方を通して多用されているのは *conqueror* とその動詞、名詞 (*conquest*) (第1部29回、第2部26回) である。*tyrant*, *tyranny* はわりに少なく、第1部に7回、第2部には12回見出されるのみである。*sovereign* も同じ位 (第1部に6回、第2部8回) 使われている。*royal* という形容詞とその派生語は第1部では15回、第2部では10回使われている。タマレインの武勇を示す言葉、例えば *valor* (*valiant*) は第1部には12回、第2部に6回使われているが、その他は *honor* (*honorable*) が数多く目につくこと (第1部34回、第2部25回) と *puissant* という誉め言葉が少し使われていること (第1部5回、第2部

2回)が目立つ程度である。

反対にタマレインの王者の夢は敵の破滅の上に築かれていると考えれば、この劇には「死」とか「殺人」という言葉が多く出てきていても不思議ではない。death, die, dead は第1部に47回、第2部に91回も使われている。⁽²⁵⁾ slaughter は第1部に6回、第2部に5回、massacre は第1部に2回、第2部に1回見られる。slay や perish はわりに少なく、kill は第1部と第2部にそれぞれ3回と5回、slay は3回と1回、perish は両部に2回ずつ見られるのみである。又、blood(y)が第1、第2共に30回も出てくるのは、この劇の血腥さを印象づけているし、⁽²⁶⁾ pierc(ing) (第1部7回、第2部12回)とfiery (第1部5回、第2部4回)がタマレインの容姿風貌の描写に多いことは敵に対する彼の威圧感を良く表している。⁽²⁷⁾

壮大、雄大というタマレインのイメージに寄与していると思われるもう一つの要素は単純なことからこの劇の台詞に使われている色彩である。まず、マーロウのこの劇におけるblank・ヴァースをダウデンが「金色の刺繍で固まった豪華な錦織の長衣」⁽²⁸⁾に例えたように金色(gold, golden)は第1部で18回、第2部で20回も使われている。次に多いのは白色、又は銀色(white, silver, ivory, snowy)で第1部に17回、第2部に8回使われている。赤色やred, ruddyの他、先ほどのbloodを入れれば60回以上になることは確かである。この他にscarlet(第1部1回、第2部2回)crimson(第2部2回)、vermillion(各部1回)、又はpurple(各部1回)、も深紅を表す変化形として使われている。又、黒色もcoal-black(Pt.I, V-i-9)とかebon(ebony)(Pt.I, IV-ii-28)としても多く使われ、同系統の色は第1部に9回、第2部に3回見られる。⁽²⁹⁾ 金、白(銀)、赤、黒の4色を効果的に使おうとしたことは、第1部第5幕のト書きでダマスカスの乙女の哀訴に耳をかさないタマレインがall in black and very melancholyという容姿で出てくる事を指示している所や、第2部で瀕死のゼノクラテを惜しむタマレインがこれらの色どりのみを使って自分の悲しみを次のようにあらわしていることからわかるであろう。

Black is the beauty of the brightest day;
The golden ball of heaven's eternal fire
That danc'd with glory on the silver waves
Now wants the fuel that inflam'd his beans

(Pt.II, II-i-1-4)

もう一つ非常に具体的にこの劇のパノラマ的壮大さをあらわしていること
といえば、人名と地名への言及の多さがあげられるであろう。⁽³⁰⁾ 形容詞形
の固有名詞を除いても、人物あるいは神々をさす固有名詞は第1部に488、
第2部には328も見出される。又、タマレインの攻略した範囲を示す地名は
やはり形容詞形を除いて、第1部に183、第2部に259見いだされる。地名
は人名よりも形容詞として、例えば Persian government (Pt.I I-i-91) と
か Caspian Sea (Pt.I, I-ii-195) として使われることが多いので地名の総数
はこれらを入れるともっと多くなると思われる。第2部になると地名の多さ
といっても羅列が多く、例えばテケレスが自分の遠征について語る所 (I-iii-
207-17, 地名10回) 等は単調の感を免れ得なくなる。

次にタマレインの王者としての支配欲を探ってみたい。その一部は既述し
たような大言壮語の群れの中にあらわされていると思われが、更にそれをシェ
イクスピアの作品にあられる王者たちの名言という視点から比較してみる。

タマレインはその前後にイギリスの演劇に登場した王達の誰とも異なると
考えられるが、それは歴史を神の啓示の一つと考えていない、とか、de
casibus 的運命感を信じないとかいう点が奇異に見えるということよりも、
当時の演劇に見られはじめた自己内省的台詞をはく人物の持つ心情が全く欠
けているという点で他の王達とことなっていたのではないかと思われる。リ
ブナー (Ribner) は「古典時代の後の歴史では人間の性格の発展に強調点
をおくことが重要な役割をはたすことになったが……それはタマレインに
は全く見られない」と言いきっているし⁽³¹⁾、スペンス (Spence) はコートウ
プ (Courthope) の言葉を借りて「マーロウの主人公はマキヤベリの道徳の原
則の持ち主である」⁽³²⁾ といっている。タマレインの中にあるマキヤベリ的要

素の程度についてはマイヤー (Meyer) がその著 *Machiavelli and Elizabethan Drama* で論じているようにマーロウの劇の他の主人公、例えば「マルタ島のユダヤ人」のバラバスや「エドワード2世」のモーテイマーよりも少ない⁽³³⁾ かもしれないが、タマレインが心の中の葛藤に悩んだり、自己研鑽して発展する人物でないことは彼の言葉からも行為からも明白であると思われる。そこでシェイクスピアの史劇の王が王権又は王座について持っていた考え方を表す言葉、または王以外の者からみた王座についての言葉を諺辞典から拾い、併せてその他のシェイクスピア劇(喜劇を除く)の名言の中でそういう言葉がどの位の比率を占めていたかを見ってみることにする。タマレインの言葉も名言として取り上げられていれば考慮するのは勿論である。表ははじめにシェイクスピアの史劇を制作年代順に示し、次に彼のその他のジャンルの劇を見て、最後にマーロウの作品をこれ又制作年代順に書くようにした。使用した諺辞典は以下の2点である。

Everyman's Dictionary of Quotation and Proverbs, Compiled by D.C. Browning, J.M. Dent and Sons, London, 1950

Bartlett's Familiar Quotations, Compiled by John Bartlett, Macmillan, London, 1992

* "A"は王について、又は王による名句、“B”はその他の名句を表す。

titles	Browning			Bartlett		
	A	B	全体へのAの割合	A	B	全体へのAの割合
Henry 6- I	0	4	0	0	13	0
Henry 6- II	0	9	0	0	21	0
Henry 6- III	2	6	25	1	28	3.4
Richard III	2	19	9.5	2	33	5.7
Richard II	6	26	18.8	5	25	16.6
John	1	16	5.9	0	39	0
Henry 4- I	2	67	2.9	2	91	2.1
Henry 4- II	1	37	2.6	1	47	2
Henry 5	5	30	14.3	5	41	10
Henry 8	3	12	20	2	30	6.3
Titus	1	4	20	1	7	12.5
Romeo & Juliet	0	47	0	0	69	0

Julius Caesar	0	62	0	3	71	4.1
Twelfth Night	0	40	0	0	52	0
Hamlet	1	179	0.5	1	221	0.4
Troilus & C	0	11	0	0	38	0
Othello	0	67	0	0	104	0
Lear	1	56	1.8	1	89	1.1
Macbeth	1	101	0.9	1	122	0.8
Anthony & C	1	31	3.1	1	51	1.9
Coriolanus	0	10	0	0	21	0
Pericles	1	3	25	0	4	0
Cymbeline	0	12	0	0	17	0
C.Marlowe						
Tamburlaine	2	3	40	1	3	25.5
Dr.Faustus	0	6	0	0	5	0
Jew in Malta	0	1	0	0	1	0
Edward 2	0	1	0	0	1	0
Hero & Leander	0	1	0	0	1	0
Titus	1	4	20	1	7	12.5

以上の表からわかるように、シェイクスピアの劇の中で史劇とそれ以外の劇を比べてみると史劇の中にやはり多く王による又は王についての名言が多く現れている。特に「リチャード2世」、「ヘンリー5世」に多い。名言の総合順位は史劇の中では「ヘンリー4世」第1・第2部が1位と2位を占めているが、王座についての台詞は少ない。逆に名言の総合の数は少ないが、その中で王座に関する台詞が多いのは「ヘンリー6世」第3部と「ヘンリー8世」である。

台詞の内容をみると、王の中で一番生存年代の古いジョン王を扱っている「ジョン王」に出てくるものは、コンスタンス夫人のもので重要なものではない。⁽³⁴⁾ 在位年代としては次にくるリチャード2世に至って初めて王による王座についての感想が(名言として)出てくる。We were not born to sue, but to command (I-i-19)。

これはここだけ引用すると自信に満ちた言葉に聞こえるが実際はノーフォーク公とヘレフォード公の対決に頭を痛めているリチャード王がその仲裁をする時の台詞で弱々しいためらいがふくまれている。後の二つのリチャードの台詞、What must the king do now? Must he submit? The king shall do it. (III-iii-143) とそれに並行する台詞 (II-i-31, III-ii-54, III-ii-155) も皆

気弱な王の気持ちをあらわしたものである。次の「ヘンリー 4 世」では第 1 部にある 2 つ(II-4-426, III-i-43) はフォルスタッフ等の冗談の中に出てくるものであるが、第 2 部の *Uneasy lies the head that wears a crown* (III-i-31) は王の座の重荷を吐露した有名な台詞である。「ヘンリー 1 世」ではカンタベリー大僧正がヘンリー 5 世の立派な変身ぶりを讃えて *Consideration, like an angel, came / and whipp'd the offending Adam out of him* (I-i-28) とか *Turn him to any cause of policy, / The Gordian knot of it he will unloose* (I-i-45) と言ったりするほかに彼による王中心の秩序ある社会の推奨(蜂蜜の集団になぞらえて)の台詞(I-ii-187-205)があったりする。その他ヘンリー 5 世自身が、国民は王に従うべきだが、王は彼ら一人一人の魂までは立ち入らない(*Every subject's duty is the king's; but every subject's soul is his own.* IV-i-185 大山俊一訳: 国民の一人一人は国王に忠誠を尽くす義務がある。しかし彼らの魂はあくまで彼ら自身のものである。)という名文句を言っている。「ヘンリー 6 世」では、王がヘンリー 4 世と同じように、羊飼いの方が国王より気楽で幸せという意味のこと(第 3 部 II-v-42) や、更に積極的に現実の王座を否定する *My crown is in my head* ではじまる名台詞(第 3 部 III-i-62)をいっている。「リチャード 3 世」では王座については、未来の強力な王であるリッチモンドの自己正当化の台詞(V-ii-23)とリチャード自身の自信たっぷりの *The king's name is a tower of strength* (V-iii-12) という考えが述べられているのみである。「ヘンリー 8 世」では王は王権についての意見は何も言わず、アン・ブリンとキャサリンがそれぞれ王座にむなしさ(II-iii-19)と神は国王より高い所にいる(III-i-100)ということを訴えている。⁽³⁵⁾ こうしてみると、概してシェイクスピアの史劇の王達の台詞の中で今も名言として生き残っているものについては一般に王権の空しさ、重苦しさを強調するものが多いといえそうである。

これに反し、「タマレイン」の名言の中にはこの種のもの一つもない。王座についてタマレインは *Our souls … / Will us to wear ourselves*

and never rest / Until we reach … / The sweat fruition of an earthly crown (Pt.I, II-vii-18-29, Bartlett). Is it not brave to be a king, Techelles? (Pt. I, II-v-51 Browning) 等というが、王の座、それへの夢に酔うといった感が深い。彼の思想には屈折がなく、思考は王国、財宝、名誉欲、情欲と展開はしても発展しないので、彼が王者について内省することは一度もない。名言集の他にもタマレインは勝者(王者)の心境を次のように言っている。

Well said, Theridamas! Speak in that mood,
For “will” and “shall” best filleth Tamburlaine,
Whose smiling stars gives him assured hope
Of martial triumph ere he meet his faces

Pt.I, III-iii-40-44

又、三男セレピナス (Celebinus) にも

If thou wilt love the wars and follow me,
Thou shalt be made a king and reign with me,
Keeping in iron cases emperour,

Pt.I., I-iii-47-49

と言っている。そこには怖れも迷いも自己抑制もなく、あるものはただ明快な支配欲のみである。彼はその点がトラヴェルシのいう「王杓(しゃく)」をふるいたくても過去からのしがらみのある内的矛盾によってそう完全にはいかない」国王達と異なるのである。⁽³⁶⁾ タマレインはマイヤーによるとバラバスのような fox ではなく (he is all) lion⁽³⁷⁾ ということになるが、マキャベリの策略に長けた君主でも自己保存の計算をする支配者でもないということが、上に引用した名言集とタマレインの言葉との対比によって多少明らかになったのではないだろうか。このようにして、心理的陰影を持たない王者の台詞は度重なると(特に「タマレイン」第2部) extravagance と absurdity に墮落しやすいということはクレメンも言うとおりで⁽³⁸⁾、その為にこの小論の前半で見たマーロウの詩句の修辞学的卓越性が第2部で漸減してい

ることは鑑賞者の側からみると残念なことであると言わざるを得ない。故に以上の些少ではあるが客観的な観察から「タマレイン」の魅力はやはり王者の人間性にあるのではなく、ブランクヴァースを駆使した華麗な言葉の展開にあるのだということがわかって頂けたら幸いである。

Notes;

- 1 Tucker Brooke, "Marlowe's Versification and Style," *Studies in Philology*, Vol. 19, pp.187-99.
- 2 Donald Peet, "The Rhetoric of Tamburlaine," *ELH*. Vol. 26, No.2, p.153.
- 3 Brooke, pp.200-3.
- 4 Brooke, p.189.
- 5 I-i-187 Cos., I-i-188 Ort., I-ii-33 Zeno., I-ii-106 Tech., I-ii-149 Tech., I-ii-259 Zeno., V-i-197 Tam., V-i-505 Usu.
- 6 Other examples are seen in I-ii-12, Alm., I-ii-13 Call., I-ii-14 Alm., I-ii-15., I-iii-111 Tam., III-iii-19 Sold., etc.
- 7 "Very numerous cases of presumably unconscious repetition, where vivid ideas automatically reappear at considerable intervals with slight difference of wording ..." Brooke, p.197.
- 8 Brooke, note 25, pp.197-8.
- 9 Peet, p.149.
- 10 See note 8.
- 11 "They perhaps mark the relative haste and poverty of thought in that work (=the second part of Tamburlaine)," Brooke, p.197.
- 12 "The very frequent use of a trisyllabic or quadrisyllabic word, often a proper name, at the end of the line," *Englische Studien*, XLIII p.122, quoted in Brooke, p.194.

- 13 E.A. Abbot *A Shakespearian Grammar*, Senjo, p.305; O. Jespersen, *A Modern English Grammar*, II 15-481, George Allen and Unwin, 1970.
- 14 Post-posed adjectives; Pt.II-ii-155-6, 191-2, 211, II-i-8-9, 52-3, 65, II-ii-43, 48, 62, II-iii-19-20, II-vi-9, II-vii-24, III-iii-105, 271, IV-i-64, 177, V-i-76, 400, etc.
- 15 Pt. I, I-i-113, I-ii-61, 157, II-i-21, II-ii-73; Pt.II, I-iii-3, V-i-145, V-iii-246-7.
- 16 Pt.I, II-iii-34, II-v-16, 73, III-i-26, III-iii-117.
- 17 Pt.I, I-i-152-3, 170-1, I-ii-21-2, 84, 87-91, 93-4, 95-7, 212-3, II-i-12, II-ii-46, II-iii-18-21, 65, II-v-94-6, III-ii-50, 53-4, III-iii-4, 23, 103-4, 108-9, 118, 120, 121, IV-iii-31-2, V-i-155-6, 231-3, 254-5. Pt.II, I-iii-18-9, 51, 156, 159-60, III-iv-42, 46, 47-8, IV-i-16-7, 55, IV-ii-5-6, 29-30, IV-iii-122, V-i-10-11, 64, 86-9, 138-9, 144-5, V-iii-38-9, 151-3.
- 18 Brooke (pp.200-1) and Peet (p.148) quote this statistics of Carpenter's.
- 19 Other examples are; I-i-3 Myc., I-i-10 Cos., I-i-11, Cos I-i-119, Cos., I-i-127-8 Men., I-i-132 Men., I-ii-36-51 Tam., I-ii-102-5 Tam., I-ii-237, etc.
- 20 注19を参照。
- 21 I-i-29 My., I-i-69 Ther., I-i-113-4 Cos., I-ii-146 Tam., I-i-166 Ort., I-iii-10 Zen., I-ii-48 Tam., I-ii-130 Tech., I-ii-224 Ther., I-ii-249 Ther., I-i-39 Cos., II-i-41 Cos., Ii-ii-45 Mea., Ii-ii-65 Mea., II-ii-67 Mea., II-iii-2 Cos., II-iii-44 Tam., II-v-76 Tam., III-i-25 Baj., III-ii-67 Agy., III-ii-85 Agy., III-ii-91 Agy., III-ii-112 Usu., III-iii-42 Tam., III-iii-95 Baj., III-iii-145 Baj., IV-i-8 Egy., IV-i-13 Mess., IV-i-31 Egy., IV-iii-12 Egy., IV-iii-21 Baj., V-i-356; PT.II, I-iii-35-6 Zen., III-ii-

149 Tam., III-ii-150 Tam., III-ii-154 Usu., III-v-59

Tam., IV-i-16-7 Cal, IV-i-76-7 Tam., IV-iii-31 Tam., IV-iii-118

Tam., IV-iii-132 Tam., V-i-36 Bab., V-i-129 Tam., V-iii-18 Ama.,
V-iii-161 Amy., V-iii-213 Usu., V-iii-222 Tec., V-iii-252.

22 当該のタマレインの台詞は第1部では6回(全36回中16.6%)、第2部では8回(全47回中47%)である。

23 他の例: Pt.I III-ii-5, IV-ii-7, IV-iv-121, V-i-140; Pt. II I-iii-35-6,
III-i-57, V-i-59, V-i-71 etc.

24 *king(s)*, *kingly*:

I-i-20, 55, 92, 93, 95, 149, 175, I-ii-55, 58, 112, 172,

198, 214, 226, 242, 246, II-i-49, 51, 57, 64, II-ii-42, II-iii-42, 45, 62, II-iv-17, 19, 21, 22, II-v-20, 21, 22, 51, 53, 56, 57, 59, 65, 67, 87, II-vi-35, II-vii-56, 67, III-i-1, 24, 45, III-ii-88, 108, III-iii-14, 27, 36, 93, 99, 101, 128, 132, 190, 214, 216, 263, IV-ii-61-64, 73, 78, 81, IV-iv-197, 112, 116, 127, V-i-74, 138, 382, 469, 480

crown

I-i-112, 135, 157, 161, 179, I-ii-27,57,91, 242, 246, II-i-50, II-iii-35, 53, II-iv-9, 14, 26, II-v-1, 5, 7, 60, 76, 86, 88, 98, II-vii-2, 12, 29, 37, III-iii-30, 98, 113, 124, 130, 215, 216, 219, 220, 221, 224, IV-ii-93, IV-iii-13, 23, IV-iv-112, 113, 137, V-i-259, 356, 444, 449, 481, 489, 491, 501, 505

throne

Pt.I I-ii-237, II-i-17, IV-ii-15, V-i-77, 453

empire, emperor

Pt.I I-i-112, 126, 135, 151, 162, 169, I-ii-39, 64, 67, 73, 167, II-iii-39, 65, II-v-15, II-vi-33, III-i-4, 22, III-iii-32, 37, 87, 204, 234, IV-ii-32, 58, 92, IV-iii-20, IV-iv-136, V-i-74, 99, 307, 352, 469, 481 PT.II I-i-55, I-ii-64, I-iii-7, 49, 96, 110, II-iv-35, III-i-10, 11, III-iv-43, 49, III-v-

1, IV-iii-118

majesty

Pt.I I-i-35, I-ii-165, 209, II-i-26, II-v-16, 48, III-ii-61, III-iii-226, IV-i-16, IV-ii-31, 114, IV-iii-19, V-i-48, 79 PT.II I-iii-17, 155, II-i-4, 11, II-iv-32, 39, 60, II-i-76, 78, III-ii-118, III-iv-47, III-v-34, 39, IV-i-3, 20, 89, 96, 157, IV-iii-25, 43, 50, 74, V-i-83, 194, V-iii-24, 27, 38, 78, 98, 103, 184, 205, 213

conqueror, conquest, conquer(ing)

Pt.I I-i-7, 75, 126, I-ii-37, 192, 219, 220, II-ii-58, III-i-24, III-iii-10, 31, 82, 148, 194, 209, 211, 212, 230, IV-i-33, 135, V-i-23, 56, 196, 208, 286, 359, 366, 442, 515; PT.II I-i-17, 49, I-iii-47, 223, II-ii-19, II-iii-47, II-iv-136, III-i-40, III-ii-110, III-iii-3, III-v-83, IV-i-6, 64, 191, IV-iii-63, 88, 96, V-i-5, 28, 85, 220, V-ii-53, 55, V-iii-12, 124

tyrant, tyranny

Pt.I II-i-55, II-ii-102, II-vii-42, IV-ii-7, IV-iv-22, 100, V-i-404 PT. II III-iv-29 IV-i-138, 145, 146, IV-ii-54, 56, 77, V-i-111, 133, V-iii-18, 55, 221

sovereign

Pt. I I-i-25, 70, 105, III-iii-243, V-i-157, 306, Pt.II I-ii-7, II-ii-24, II-iv-57, III-ii-153, III-v-88, V-iii-14, 198, 213

royal, royally, royalize

Pt.I I-i-97, II-i-18, II-iii-8, 46, II-v-1, II-vii-5, III-iii-219, 102, IV-i-16, 37, IV-ii-15, 21, IV-iii-17, V-i-104, 525 Pt.II I-i-106, I-ii-21, I-iii-82, II-i-4, III-i-9, 13, 21, III-ii-37, IV-iii-111, 125 valor, valiant Pt.I I-i-57, I-ii-166, II-i-1-2, 28, 38, II-iii-11, 40, 61, III-i-32, III-iii-11, 89, V-i-181, 119, Pt.II II-i-3, IV-i-72, 86, 115, IV-iii-15, V-i-119

honour, honourable

Pt.I I-i-172, I-ii-205, 219, 251, II-i-18, 51, II-ii-66, II-iii-41, II-v-33, II-

vi-210, III-ii-28, 30, 51, 97, 110, 113, IV-ii-21, IV-iv-83, 126, 138, V-i-19, 35, 41, 75, 82, 107, 259, 350, 376, 399, 477, 484, 497, 531, PT.II II-i-45, II-ii- 43, II-iii- 33, III-i-17, 24, 31, 71, IV-i-37, 48, 49, 106, 204, IV-ii-55, IV-iii-6, 38, 83, 86, 87, V-i-11, 131, V-ii-27, V-iii-12, 26 (2x), 199

puissant

Pt.I I-ii-18, III-i-41, III-iii-96, 246, V-i-88, Pt. I III-ii-156, V-iii-35

25 *death, die, dead*

Pt.I I-i-64, ii-59, 248, II-i-21, v-61, vi-28, vii-8, vii-48, III-i-19, ii-17, ii-24, 34, 72, 95, 98, 105, iii-39, 138, 197, 207, 263, IV-i-61, ii-17, 90, 118, iv-94, 96, V-i-17, 31, 91, 111, 117, 120, 128, 129, 304, 316, 329, 348, 351, 407, 410, 417, 422, 430, 431, 455, etc. The reason that *there are many die,*

death, etc. in Part II is probably due to the death of Zenocrate in Act II.

26 *slaughter*

Pt.I II-ii-30, 69, II-v-27, III-iii-138, 149, V-i-131, Pt.II I-i-36, I-iii-93, II-i-5, III-iv-58, V-iii-50

massacre

Pt. I II-ii-67, V-i-227, Pt.II II-i-10

kill

Pt. I I-i-78, II-i-41, III-ii-91, Pt.II III-iv-26, 35, IV-i-27, 53, 93

slay

Pt.I I-i-24, I-ii-177, III-iii-209, Pt.II III-ii-94

perish

Pt.I I-i-72, III-iii-24, Pt.II I-iii-171, III-iii-45

bloody

II-vii-11, III-ii-159, IV-ii-116, ii-11, iv-1, 12, 93, V-i-339, 460; blood

I-i-80, II-vii-43, III-ii-45, III-iii-58, 165, 201, IV-i-53, 56, IV-ii-4, 53, 55, IV-iv-2, V-i-25, 85, 97, 227, 283, 309, 411, 438, 477

27 *pierce* (*piercing*)

Pt.I I-ii-160, 250, II-i-14, 44, III-ii-19, v-i-220, 302, Pt.II I-ii-45, ii-145, II-iv-84, 125, III-ii-152, iii-6, IV-ii-66, V-i-44, V-iii-58, 166, 190, 226

fiery

Pt. I I-ii-56, 158, II-i-15, IV-i-13, V-i-185, Pt.II I-iii-146, II-iv-58, III-ii-4, V-iii-169

28 "A gorgeous robe of brocade, stiff with golden embroidery,"

Fortnightly Review XIII, 81, Quoted in Brooke, P.198.

29 *gold(en)*

Pt. I I-i-121, 143, ii-85, 124, 126, 139, 182, II-ii-62, 66, 70, iii-37, v-60, III-iii- 212, IV-ii-3, 62, IV-iv-7, 9, V-i-123 Pt.II I-i-99, ii-30, 35, 48, iii-223, II-iv-2, 131, III-iii-8, iv-63, 87, IV--i-1, 68, 192, IV-ii-40, IV-iii-7, 115, 123, V-i-154, ii-151, 226

white

Pt.I I-i-77, ii-88, 89, 98 (2x.), III-ii-19, iii-151, 161, iii-50 (2x.), 51, IV-ii-111, V-i-68, 81, 141, IV-iii-132, V-iii-232

red

Pt.I IV-i-55, ii-53, 54, V-i-314: ruddy IV-iv-121

scarlet

Pt.I V-i-118, Pt.II I-i-34, III-iv-55

crimson

Pt.II I-88-46, III-ii-108

vermillion

Pt.I IV-ii-117, Pt.II V-i-86

purple

Pt.I V-i-460, Pt.II I-iii-80

black (ebony)

Pt.I III-ii-77, IV-i-59, ii-28, 119, V-i-9, 72, 217, 266, 314 Pt.II I-iii-27, 142, 145

30 「タマレイン」中の人名・地名：

Pt,I	Persons	Places	Pt.II	Persons	Places
I- i	34	31	I- i	58	49
I- i	46	16	ii	17	11
			iii-	28	46
II- i	11	2	II- I	4	12
ii	15	3	ii	14	10
iii	11	3	iii	8	5
iv	2	1	iv	26	3
v	29	8	III- i	12	30
vi	2	1	ii	16	7
vii	22	5	iii	7	4
III- i	10	14	iv	14	1
ii	20	2	v	29	19
iii	59	37	IV- i	18	5
IV i	8	4	ii	11	0
ii	19	7	iii	9	19
iii	15	7	V- i	27	15
iv	31	18	ii	16	17
V-i	74	24	iii	17	16
total	488	183	total	328	259

31 “The emphasis upon human character development became an important part of all post-classical history …But we do not find it

- in Tamburlaine." Irving Ribner, "The Idea of History in Marlowe's *Tamburlaine*," in R.J. Kaufmann ed. *Elizabethan Drama*, Oxford University Press, New York, p.90.
- 32 "Marlowe's heroes are exponents of the Machiavellian principle of *virtue*" Leslie Spence, "Tamburlaine and Marlowe," *PMLA*, No.42, Vol.3, p.616.
- 33 Edward Meyer, *Machiavelli and the Elizabethan Drama*, Burt Franklin, New York (Quoted from 1897 edition.).
- 34 Constance: "Here I and sorrows sit; Here is my throne; bid kings come and bow to it." III-i-73.
- 35 Anne: "Verily, / I swear, 'tis better to be lowly born, / And rage with humble livers in content, / Than to be perk'd up in a glistening grief, / And wear a golden sorrow."
Kath.: "Heaven is above all yet; there sits a judge / That no king can corrupt." III-i-100.
- 36 "It is his (=Henry IV's) expressed desire to rule well by the necessary exercise of royal authority, but the desire is flawed by the presence of inner contradictions connected with his own past actions."
Derek Traversi, *Shakespeare*, from Richard II to Henry V; Hollis and Carter, p.49.
- 37 Meyer, p.39.
- 38 Wolfgang Clemen, *English Tragedy before Shakespeare*, Methuen, London p.125.